

## 巻 頭 言

横浜国立大学大学院環境情報研究院 根上生也

2011年3月11日、あの大地震が起こったとき私は成田空港上空にいた。スペインからフランクフルト経由で帰国する飛行機の中だった。機長から、スタッフが全員退避してしまったため、成田空港に着陸できないというアナウンスがあった。その後、機長はJAL本社と交渉し、羽田に降りるか、別の空港に行くかを検討していた。そして、私たちを乗せた飛行機は成田空港上空を3周した後、函館空港へと向うことになった。

函館空港に着陸したものの、入国管理の関係でなかなか飛行機を降りることができなかった。携帯電話のワンセグテレビを見ていた人もいたけれど、満足に情報を得ることができなかった。いったい日本はどうなってしまったのと不安が募る。結局、その日は函館のホテルに宿泊することになった。

今思えば不謹慎だったけれど、せっかく函館に来たのだからと、同行していた学生と函館の夜を満喫しようと考えた。ところが、津波で道路が水没してしまい、思うように行動できなかった。もちろん、テレビで見るような東北地方を襲った大津波とは比べ物にならないくらい小規模なものだったけれど…。

そうやって私自身も災害に巻き込まれていることを実感していった。しかし、その後、テレビで報道される東北地方の被災状況を連日目にするにつれ、私も傍観者の一人になりさがっていく。この災害と私はどう向き合えばよいのか。著名人やアーティストたちが被災者を慰問して、コンサートをしたり、炊き出しをしたりしているけれど、数学者である私がそういうことをしたところで、喜ばれるとも思えない。今でできることは義援金を寄付することくらいだ。

その一方で、東日本の復興に責任を負うべき政治家たちは変なことばかりしている。どの党の主張を是とすべきかを論じるつもりはないが、数学者的な立場から見ると、この政治状況は明らかにおかしい。法案の内容自体が気に入らないから反対するというのならわかるけれど、首相が誰になるかで、同じ法案が通ったり、通らなかったりしていいのか？

こう言うと、「おまえは菅首相を支持するのか！」といきり立つ人もいそうだけれど、そういう行動はまるで数学的ではない。私は、野党の言い分と与党の言い分のどちらが正しいかではなくて、その議論の仕方自体を問題にしているのだから。

たとえば、私たち数学者が大学院生たちとゼミをしたり、研究者仲間と議論したりするときに、誰が言ったかで、命題の真偽を決めたりはしない。センスのいい人や頭のいい人もいるから、発言の信頼性には差があるけれど、1つの命題の真偽が発言した人によって

左右されるわけではない。

それに、誰かが間違っただけを言ったからといって、その人を責めたりはしない。それをきっかけにして新たな議論が展開できれば、喜ばれさえする。一度口にしたことが現実合わなければ、簡単にそれをひるがえす。若い人も自由に発言ができる雰囲気を大切に、年配の先生の発言だからといって、その言葉を鵜呑みにはしない。恫喝したり、話題をそらしたりない。人の力を借りずに一人で問題を解きたいときもあるけれど、人と議論をするときは、思い込みを排除するために言葉をぶつけ合い、みんなで真実に迫ろうとする。何かを生み出そうと知恵を絞る。

一方、政治家やその行動を報じるマスコミの言動はこれと正反対なことが多い。批判的な精神で物事と向き合うことは大切だけれど、いつも誰かの責任追及ばかりしている。1%でも間違いがあれば、うまくいっている99%は無視されるし、他人の秘めた思惑を勝手に憶測して、どんなにいいことを言っても台無しにする。どんどん先回りをして、それに思慮が及んでいなかったことを非難する。自分の知らないことでも絶対に間違えずに100%の答えが出せる人。神懸った超能力者でないと、この国では首相は務まらない。

こんなふうに考えていくと、数学者も捨てたものではないと思う。私たちは先入観を持たずにいつも真実を理解しようとする。そして、何か新しいものを生み出そうとする。そのために、自由な議論をする。単に計算に長けていたり、論理的であったりすることよりも、こういう精神を備えていることを誇りに思いたい。そして、その精神とともに日本の復興に貢献していきたいと思っている。

ちなみに、「数学者の」というわけではないけれど、数学を学ぶことに伴って涵養される合理的な精神を有した人格を、私は「数学的人格」と呼んでいる。研究集会のたびに夜の街を飲み歩いている姿にこの数学的人格を重ねるのは難しいかもしれないが…。

いずれにせよ、もう少し状況が落ち着いてきたら、本当の数学の在り方を子どもたちに伝えるために被災した学校に慰問に行けたらよいと思う。はたして、自分の家や学校を失い、本気で生きていくことを迫られた子どもたちは、形骸化した受験数学を強いる学校に戻りたいと思うだろうか。彼らが本気で向き合える数学を提供してあげたい。

さて、函館空港に着陸した翌日、私たちの飛行機は成田空港に向けて出発することになった。搭乗する前に機長がこれまでの経緯を説明してくれた。そして、「函館に来たのは判断ミスではないかというご指摘もありましたが」と言って頭を下げた。しかし、私たちは機長や乗務員のみなさんの献身的な行動に感謝して拍手した。きっと彼らの判断に文句を言っていた輩は心の中で自分を恥じていたことだろう。

数学的人格はいろいろなところにいる。そして、人々を救っているに違いない。